「共感的反感」とは何か

――セーレン・キルケゴール『不安の概念』における心理学的表現に関する一考察――

平　林　孝　裕

はじめに

思想家には、その人の名に特有にむすびつけられる幾多の表現がある。そのような表現こそが、思想家の独創を意味すると言ってもよいだろう。本論で取り扱おうとする表現もそういった思想家の独創を示すものの一つである。「共感的反感」、この言い回しはキルケゴール『不安の概念』で用いられる表現である。おそらくキルケゴールの著作に通暁した読者は、彼らしい「弁証法的」表現であると評するにちがいない。「共感」と「反感」、明らかに相反する二つを結びつけた言い回しは確かにキルケゴールらしい表現である。「共感」も「反感」も、のちに確認するように古典語起源の固い用語であるとはいえ、術語というほど日常語から乖離した表現ではない。矛盾した奇妙なものであったとしても、その言わんとするところを想像することは十分に可能である。

『不安の概念』の研究者たちも、その故だろうか、「共感的反感」（もしくは「反感的共感」）という奇妙な表現を別の言葉で言い換えることはあっても、それ以上に踏み込んで解明しようとはしなかった。「不安」の概念を特徴づける枢要な表現が、そのような言い換え、パラフレーズで理解できる、理解し尽くせるものなのであろうか、それが本論の問いである。たんに言い換えでとどまらない深長な意図をもって、キルケゴールはこの表現を選んだのではないか、それを解明することが本論の目的である。そしてその地点からキルケゴールのテクストを解釈する地平を展望することを目指すことにしよう。そのため本論は以下のように構成される。1)「共感的反感」という表現がどのように用いられているか、またその字義的な意味はどのように確定されるか、2)「共感」「反感」という用語を用いる際、どのようなコンテクストが想定されるか。この問いにはそもそも「共感」「反感」という語が誰に帰属する用語として考えられたかが含まれる。3)「共感」という用語の帰属が明らかになったとき、この表現はキルケゴールのテクストの今一つの用語、「自己情念的」〈autopathisk〉につながる。この表現はこれまでほとんど注目されることはなかったが、その重要性を明らかにしたい。これに関連して、キルケゴールにおける「心的葛藤」、もちろんそれは信仰者の「葛藤」であるが、これに言及しよう。この考察によってキルケゴールのテクストの「心理学」的地平を顧慮する重要性の一端が明らかにされる。

1.「共感的反感」

『不安の概念』における当該の表現が登場する一節をまず確認することから始めよう。キルケゴールは「原罪」の心理学的起源を考察して次のように述べる。

我々が不安における弁証法的規定を考察するならば、これらの規定が正しく心理

学的な両義性〈den psychologiske Tvetydighed〉を持っていることが示される。不安は共感的な反感であり、そして、反感的な共感である〈Angest er *en sympathetisk Antipathie* og *en antipathetisk Sympathie*〉。（中略）。言葉遣いがそれを完全に確認している、甘い不安、甘い懸念、と言われるし、〔また、〕変な不安、内気な不安、等々とも言われる。[1]

言うまでもなく「共感的反感」もしくは「反感的共感」が指している事態は、『創世記』三章に描かれる、堕罪直前の男（アダム）、むしろのちにエバ（命）と呼ばれる女の心理である。女は「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない」（3節、2章16節参照）[2]と主なる神に教えられている。しかし「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目をひきつけ」ていたという（4節）。とどのつまり「女は実をとって食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」のである。禁止命令にもかかわらず、女（そしておそらく男にも）に食べるように唆していた、園の実を前にした緊張にみちた心理を描写した表現である。

園の実を前にした最初の人間の心理で共起する心理的斥力と引力が、「反感」と「共感」と言われていることは明らかである。そのような斥力と引力が共起する心理こそが不安であり、相反する力の共起が、キルケゴールが指摘する「弁証法的規定」、すなわち「心理学的な両義性」にほかならない。『不安の概念』を丁寧に読み解いたアァネ・グレェンは「不安」が「両義的な力」であり、同時に「引きつけ」〈drager〉かつ「追いやる」〈skræmmer〉ものであると言い換えている[3]。

この両義性こそが不安の秘密であるが、本文の注釈者たちもおしなべてこの表現の扱いは淡白なままにとどまっている。ペーター・ペー・ローゼは当該の表現につき、むしろルドルフ・オットーに言及し、「魅惑するとともに畏怖させる神秘」〈mysterium tremendum et fascinosum〉と関連を示唆している[4]。懇切な注解で知られる英訳も、この箇所についてこの表現の原型となった日誌記述をあげたにすぎない[5]。あのツルストルプでさえも、「不安は可能性に対する可能性としての現実性である」という「共感的反感」と密接な関係にある一文に説明的な注釈をくわえるほか、この表現に一言も漏らしていない[6]。その意味で、「共感的反感」もしくは「反感的共感」は、奇妙であるが、明白な表現だと考えられている。しかしながら、その意味はその重要性に比してどれだけつまびらかなのであろうか。

---

[1] *SKS* 4, 348.（第三巻、499頁）キルケゴールからの引用はすべて、*Søren Kierkegaards Skrifter*, 28 Bind, København: Gads Forlag, 1997-2013によって、*SKS*の略号で巻数と頁数〔日誌の欄外付記には頁数にmを添える〕を示す（なお、本全集の電子版は、http://www.sks.dk で閲覧することができる。語句等の確認は電子版の検索機能、コンコーダンスを用いている）。また別冊注解は巻数にKをそえて示す。また括弧内に『キェルケゴール著作全集』（創言社、1988-2011）に邦訳がある場合、その巻数と頁をあわせて示す。なお訳文は引用の際、必要に応じて改めている。

[2] 以下、聖書からの引用は『聖書 新共同訳』による。

[3] Arne Grøn, *Begrebet Angst hos Søren Kierkegaard*, København: Gyldendal, 1993, p. 25. 同様に、Bjarne Jacobsen, *Eksistentiel Psykologi – mellem Himmel og Jord*, Frederiksberg: Samfundslitteratur, 2012, p. 285.

[4] Peter P. Rohde, 'Noter' in *Søren Kierkegaards Samlede* Værker, 3. udgave, Bind 6, København: Gyldendal, 1962, p. 352.

[5] Reider Thomte, 'Notes' in Søren Kierkegaard, *The Concept of Anxiety*, Princeton U. P., 1980, p. 235.

[6] Niels Thulstrup, 'Kommentar' in Sören Kierkegaard, *Die Krankheit zum Tode und Anderes*, Köln und Olten: Jakob Hegner, 1956, p. 717.（当該の本文は、p. 488）

「共感的反感」が不安の主要な特徴付けであることは疑いえない。先に引用した箇所のほかにも、三度にわたり同様の表現を繰り返しているからである[7]。キルケゴールにとって「共感的反感」は一貫して、不安の基本規定であった。そのことは先述の英訳注記が指示した日誌記述が示すとおりである。1842 年の日誌記述にキルケゴールは次のように書き付けている。

> 昨今しきりに、原罪の本質をめぐる論議がもりあがっている。けれども、主要なカテゴリーが欠けている――それが《不安》である。これこそが原罪の本質に特有な規定である。すなわち、不安は畏怖するものへの欲望〈en Attraa efter hvad man frygter〉、共感的な反感〈en sympathetisk Antipathie〉である。不安は個人を捉える異質な力であり、けれども、この力から自分を引き離すことができない、そうのぞまない。というのも、畏怖しているが、畏怖しているものを欲しているからである。かくて不安は個人を無力にし、最初の罪はつねに無力なままに生じる。最初の罪にはそれゆえ、明らかな帰責性が欠如しており、この欠如がその本来の魅惑である。[8]

「共感的反感」をめぐる省察に対する付記から明らかなように、この日誌記述が『不安の概念』の最初の試みであることは明白である。本書全体、少なくとも「原罪」に関する考察はこの省察を徹底することによって生み出されたといっても言い過ぎでないだろう。「共感」〈現行の綴り字で sympati〉「反感」〈同、antipati〉は、デンマーク語における外来語である[9]。ラテン語の“sympathia, antipathia”、もしくはギリシャ語から直接“sympatheia, antipatheia”からそれぞれ移植された言葉である。『デンマーク語大辞典』『デンマーク語外来語辞典』[10]によってそれぞれの意味の範囲を確認しておこう。

“sympati”は、“sym-”〔med ／共に〕と“pathos”〔lidenhed〕に語源的に分けられるため、デンマーク語固有語に対応させるならば、“medlidenhed”の語が当てられる[11]。ただし対応語で、本来“pathos”、“passion”もそうであるように、“liden[hed]”は「〔作用を〕受けた」という意味であって、必ずしも「苦しめられた」ことを意味しないことは注意すべきである[12]。この語にはまず「（本質の同類性や一致による）交互関係、相互影響関係」との説明があてられている。デンマーク語では古びた用法であるとされるが、今日、医学用語「交感神経系」〈sympatisk nervesystem〉や「あぶりだし」〈sympa[te]tisk blæk〉の意味に、その痕跡をのこす事柄を意味した[13]。むしろ、相互影響の結果としての

---

[7] *SKS* 4, 366; 400; 405.

[8] *SKS* 18, 311. 欄外に次のように付記されている。「女性は男性より不安である。それゆえ、蛇は女性に一撃を加えた。おのれの不安に女は欺かれたのである」（*SKS* 18, 311m）。

[9] キルケゴールは本文の通りに綴るが、過去、“sympathi, antipathi”と綴られ、現在は“th”を“t”で綴るため、“sympati, antipati”との語形となる。形容詞形は現在、“sympatisk, antipatisk”と綴られ、“sympatetisk, antipatetisk”は希な語形とされる。

[10] *Ordbog over det Danske Sprog*（書籍版は Det Danske Sprog- og Litteraturselskab により全 28 巻で 1918-56 年、補遺 5 巻が 1992-2005 に刊行された。電子版が https://ordnet.dk/ods/ にて公開されている）および *Meyers Fremmedordbog*（書籍版〔第 8 版〕は J.P.F.D. Dahl 及び F.V. Dahl 編により 1924 年に刊行。復刻版〔Gads Forlag, 1998〕が https://meyersfremmedordbog.dk/ にて公開されている）を参照。

[11] たとえば、キルケゴール全集の以下の注解を参照せよ。*SKS* K25, 374.

[12] デンマーク語文法でも動詞の態を表す際に、能動を“virkende”、受動を“lidende”と表現することがある。Jakob Baden, *Forlæsninger over det danske Sprog, eller resonneret dansk Grammatik*, Kiøbenhavn, 1804, p. 94. を見よ。

一致に強調が置かれ、そして、“pathos”の語が心理的反応をまさって表すとき、「感情や考え方などにおいて他者と一致すること」〈det at stemme overens med en anden (andre) i følelser, tænkemaade olgn.〉、また一般的には感情についてそれが言われる事態という意味となる。その際、引き起こされる感情は、肯定的でも否定的でもかまわないので、「他者の好都合な、もしくは（とりわけ）不都合な（苦しみをともなう、痛みにみちた）状態の観念から引き起こされた、快もしくは（とりわけ）不快の感情」〈følelse af lyst ell. (især) ulyst, fremkaldt ved forestillingen om en andens gunstige ell. (især) ugunstige (smertelige, pinefulde) tilstand〉であり、「同情」〈sam-følelse〉と訳されるべき意味（「同じ」〈sam-〉感情という点に強調がある）、またなかでも「関心もしくは好意、肯定的な関心をむける姿勢の感情」〈følelse af interesse ell. velvilje, positiv, interesseret indstilling〉として「共感」〈med-følelse〉と訳されるべき意味（他者に感情がむけられている、寄り添っている〈med-〉という点に強調がある）、となる。

これに対して“antipati”は、語源的には“anti-”〈mod-／反〉と“pathos”に分けられるが、後半部は限定的に“følelse”の意味であり、「敵対関係にあること、一致できないこと」〈modsætningsforhold; uforenelighed〉と定義され、術語として「（何ものかに対する）嫌気、敵対感情もしくは気分、（強い）反感」〈uvilje(mod en); fjendtlig følelse ell. stemning; (stærk) aversion〉の意味で用いられる[14]。『外来語辞典』をさらに参照すると、「自然におこる、何かに対する不快感もしくは憎悪、敵対姿勢、敵対的な気分、心持ち、嫌悪」〈naturlig Modbydelighed el. Afsky for noget; Fjendskab, Modstemning, Modhu, Had〉とあり、対義語として“Sympathi”が挙げられている。同様に“Sympathi”の項目に“Antipathi”が対義語に挙げられている。

われわれの「共感的反感」という表現に戻ろう。この表現が両義的、もしくは弁証法的であるためには適切な仕方で「共感」と「反感」という用語が組み合わせられる必要がある。“Antipathie”が「敵対的感情、嫌悪」を強く意味する言葉であるとすれば、“Sympathie”も同じ地平で理解されるべきであり、無論、「共感」でも十分であろうが、「関心、好意」という意味合いで解釈されねばならないことは明らかであろう。前述のように、「共感」と「反感」はそれぞれ「引きつけ」〈drager〉ること、「追いやる」〈skræmmer〉ことと言い換えられていた。そのような言い換えが概ね適切であったことを字義的に確認することができた。

さて、語義として「共感的反感」（同時に「反感的共感」）が弁証法的な関係にあることは明らかとなったが、それで十分なのであろうか。両義性そのものは「共感」の「好意、関心」〈med-〉と「反感」の「嫌悪、敵対」〈mod-〉にある。しかしながら、それはいずれも「感情」〈-følelse〉をめぐる問題である。この点に注目するならば、キルケゴールが「両義性」をたんにそう呼ぶのでなく、「心理学的な両義性」とした表現の適切さが理解さ

[13] 形容詞形として“sympatetisk”と“sympatisk”が考えられるが、『デンマーク語大辞典』ではいずれも見出し語であるが、今日一般的な語形“sympatisk”ではなく、“sympatetisk”が主要な見出し語として扱われている。

[14] 形容詞形として“antipatisk”が『デンマーク語大辞典』では見出し語とされており、今日まれな語形として“antipatetisk”を挙げている。ただし、キルケゴールの同時代であるP. L. メェラーの“antipathetisk”の用例が採用されている。

れる。この問題について、わたしたちは字義的な語釈にとどまるのでなく、「心理学」の術語としてどのように用いられてきたかを問うべきである。

2.「共感」、「反感」、そして「エゴイズム」、あるいは心理学的術語

「共感」もしくは「反感」は心理学的術語としてどのように用いられていたのであろうか。

すでに述べたが、従来の注釈者たちは「共感的反感」という表現に、その重要性にもかかわらず、立ちいった説明をくわえて来なかった。しかしながら、『新版全集』はこの表現に、適切な注解をくわえ、「共感」「反感」という心理学的術語の歴史的文脈を示唆した。先に『不安の概念』から引用した本文の注釈に以下のように記している。

> 文字通りには、共感情的な敵対感情と敵対感情的な共感情、参与し誘引される敵対心、敵対的で追いやるような参与〈medfølende modfølelse og modfølende medfølelse; deltagende, tiltrukket modvilje og modvillig, frastødt deltagen〉。ここで両義性は一重でなく二重である。感情の両形態がそもそも本質的に矛盾しているからである〈Begge former for følelse har allerede deres modsætning i sig〉。（中略）F. Chr. シバーンによる恐れの共感的＝反感的両義性を参照せよ。シバーンによれば、欲望は共感的でも反感的でもありうる。『人間精神論』〈*Menneskets aandelige Natur og Væsen*〉、第二巻、41 頁を参照。[15]

また、同書の本文で初めて「反感的」との語が登場した際の注解に

> antipatetisk, modfølende, modvillig. F. Chr. シバーン『人間精神論　心理学試論』コペンハーゲン、1819 年、49 頁における反感の定義を参照。「反感は（中略）嫌悪感のうちに、嫌悪とある程度結びついた、対象を引き離し突き放したいとの願い、そう、消滅させたいとの願いのうちに声をあげる」〈Antipathie (...) udtaler sig i Afsky og en vis dermed forbunden Lyst til at bortfjærne, bortstøde, ja tilintetgjøre Gjenstanden.〉[16]

と報告している。

『人間精神論』とは、シバーンが 1819 年に第一巻、1828 年に第二巻を発行した著作のことである。とくに第二巻は“Psychologisk Pathologie”とも呼ばれていた[17]。「パトロギー」は今日「病理学」と訳されるが、本書で言われているのは、ギリシャ語の本来の意味での

---

[15] *SKS* K4, 411.

[16] *SKS* K4, 368. シバーンの著作の当該箇所は「第二巻、1828 年」の誤り。注 37 を見よ。

[17] F. Chr. Sibbern, *Menneskets Natur og Væsen, Et Udkast til Psychologie, Anden Deel* (別名で*Menneskets Natur og Væsen betragtet i pathologisk Henseende, eller: psychologisk Pathologie*), Kjøbenhavn, 1828. 本書は現在、大変に入手が困難である。しかしながら、シバーン没後、ガブリエルによって、『心理学的情念論 人間の感情と情念に関する教説』*Psychologisk Pathologie, Læren om menneskelige Følelser og Lidenskaber,* Kjøbenhavn, 1885 として単独で刊行された（https://books.google.co.jp/books?id=yAsOAAAAYAAJ にて閲覧可能、2018 年 12 月 18 日確認）。再刊序文でガブリエルは「本出版の読者には関心がないと思われるので初版序文は割愛したこと、また、初版になかった「人間の感情と情念に関する教説」というタイトルを付したことを付記しておきたい。多くの読者には「パトロギー」という語は聞きなれないと思われたためである。些細な変更をのぞけば、ほぼ初版の再現である。」と報告している（Gabriel Sibbern, ‘Fortale’, *Pathologie*, pp. II-III）。この事情を考慮して、キルケゴールが参照しえた初版で本来は引証すべき処であるが、以下、読者の便宜を考えて再刊本から頁等を記し、初版の頁数を（　）内に示すこととしたい。

「パトス」（受動）についての学、とりわけ人間心理における受動的現象をめぐる学的考察を指している。デカルトの『情念論』〈*Les Passions de l'âme*〉およびスピノザの『エチカ』、第三部「感情の起源と本性について」、第四部「人間の隷属あるいは感情の力について」の伝統につながる学問領域である。シバーンの『情念論』をふくむ『人間精神論』は、のちに内容も簡潔な記述に改められて、『心理学』という一巻本となり、以後、シバーンは本書を改訂し続けた[18]。

本書の評価であるが、シバーンの息子ガブリエルによれば、デンマークおよびノルウェーで高い注目を集めたと報告されている。のちに教会監督となったN. フォクトマンは、「牧会者のための心理学」〈Sjælelære for Sjælesørger〉と評し、またP. M. メェラーも「著者の既刊書よりもさらに広い関心を集めるだろう」という言葉を寄せている[19]。シバーンの『情念論』が高い関心を持って受け入れられたことは、当時の書評誌をみてもまた明らかである[20]。そればかりでなく、メェラーが「その講義」は「特段、明晰で内容豊か」であったと称賛したことにから分かるように、本書は大学の講義で用いられもした[21]。これらの事実からすれば、この『情念論』の内容は広く知られていただけでなく、当時のデンマークの知識層たちも十分承知していたことが推測される。

シバーンの『情念論』そのものも興味深いものであるが、本稿に関するかぎり焦点を絞って紹介することとしよう。本書は三部から構成され、「第一章　情念論的な心的気分の一般的考察」「第二章　欲求、傾向性、情熱、およびこれらと同系の心的気分についての個別的考察」「第三章　一般的な心的変化、および関連の心的気分と傾向性についての個別的考察」と題されている[22]。そのうち第一章に「A.　エゴイズム、共感、そして反感について」との一節が設けられていることが注目される[23]。興味深い事実を指摘しておけば、本書の第三部第98節で《恐れ》と《不安》が論じられている[24]。

シバーンは、第一部序論で、情念論の対象領域を確定して次のように述べている。普遍的な知、観想や判断に対して、固有の「私」〈Jeg〉のみに関わる領域がある。この情念論

---

[18] F. Chr. Sibbern, *Psychologie, indledet ved almindelig Biologie,* Kjøbenhavn, 1843.（https://books.google.co.jp/books?id=4sI6AAAAcAAJ にて閲覧可能、2018年12月18日確認）その後、1849, 1956, 1862 に本書は改訂再刊されている。

[19] Gabriel Sibbern, 'Fortale,' pp. I-II.

[20] *Maanedsskrift for Litteratur*, udgivet af et Selskab, Andet Bind. Kjöbenhavn, 1829, pp. 35-58.（https://books.google.co.jp/books?id=yCwoAAAAMAA にて閲覧可能、2018年12月18日確認）フォクトマンについては、注41を見よ。

[21] Gabriel Sibbern, 'Fortale,' p. II. また、以下を参照せよ。Carl Henrik Koch, *Den Danske Filosofis Historie, Den Danske Idealisme 1800-1880*, København: Gyldendal, 2004, pp. 114-118. シバーン心理学講義の時代的位置づけを筆者は紹介したことがある。「セーレン・キルケゴールにおける《心理学》の問題――一つの歴史的研究――」（『理想』676号、2006）、37-56頁。

[22] それぞれ原文では以下のとおりである。"Første Capitel. Om de pathologiske Sindsstemninger i Almindelighed; Anden Capitel. Drivter, Tilbøieligheder og Lidenskaber, samt de dermed beslægtede Sindsstemninger, betragtede i det Enkelte; Tredie Capitel. De almindelige Sindsbevægelser, samt de dermed sammenhængende Sindsstemninger og Tilbøieligheder, betragtede i det Enkelte."

[23] Sibbern, *Pathologie*, pp.12-35 (pp. 17-53).

[24] Sibbern, *Pathologie*, pp. 292-293 (pp. 447-452).「98節　恐れ、不安、恐懼　恐れの多様な相、何をもって恐れを克服するか」〈§98. Frygt, Angest, Skræk; forskjellige Arter af Frygt. Hvorved Frygt overvindes〉となっている。

的領域においては、「私」であるかぎりの私が問題となるか、他者と関わり、他者と極限まで関わるがゆえに「私」であることもわすれる私が問題になる。そのため情念論的領域の心的機能、つまり情動と欲求等は、私の事柄に限られる（シバーンはそれをエゴイズム的と呼ぶ）ものと、普遍的なものに向けられた、普遍的なものに関するものに区分されることになる。固有なる私が私に関わる事柄が「エゴイズム的なもの」〈det Egoistiske〉、その私が普遍的なものに関わる事柄が「共感的なもの」〈det Sympathetiske〉と呼ばれる。というのも「普遍的なあるものへの関与という私の感情、そのようなものへの志向は共感的」〈sympathetisk er et Jegs Følelse af, og Stræben efter, Meddeelagtighed i noget Universelt〉[25] だからである。

> エゴイズムと共感、自己性と愛における好意〈Selvhed og Hengivenhed i Kjærlighed〉がこの際、すべての問題にかかわる主要論点となる。心理学的情念論の基礎は、これらの本質的な連関と対立の双方を詳細に考察することになる。もちろん、くわえて第三の要素として反感〈Antipathie〉も関連する。[26]

まず「エゴイズム」〈Egoismus〉「エゴイズム的な」〈egoistisk〉という用語に注意をはらおう。この用語は当時もずいぶんと議論の余地があった特徴づけであった。シバーン自身、「エゴイズム的という言葉が使用される場合、デンマーク語で我欲的なもの〈det Selviske〉を想起してはならない、むしろこの言葉で、その幅広い意味で、固有の私が問題となる事柄を言おうとしている」ことを注意している。もともと、同様の事柄を N. トレショウ〔もしくはトレスコウ〕は、自同情念的〈idiopathisk〉と呼んでいた。トレショウは、1813 年までコペンハーゲン大学で哲学教授を務めていた。シバーンのコペンハーゲン大学就任は、トレショウが 1811 年に新設されたノルウェー･王立フレゼリク大学（現在のオスロ大学）に転出した結果であった[27]。さらにトレショウは、シバーンに先行して経験心理学（ヴォルフ的意味での合理心理学に対して）、つまり人間学・心理学についての著作『人間本性総説、とくにその精神的面から』〈*Om den menneskelige Natur i Almindelighed, især dens aandelige Side*, 1812〉を刊行していた[28]。情念論的なエゴイズムを語る際にも、シバーンは前任者に敬意を示し、自分が「エゴイズム的」と呼称した事柄を、トレショウが前述のように特徴づけたことに理解を示している[29]。

---

[25] Sibbern, *Pathologie*, p. 10 (p. 14).

[26] Sibbern, *Pathologie*, p. 10 (p. 14).

[27] Koch, *Den Danske Idealisme*, p. 90.

[28] Carl Henrik Koch, *Den Danske Filosofis Historie, Dansk Oplysningsfilosofi*, 1700-1800, København: Gyldendal, 2003, p. 152.

[29] Sibbern, *Pathologie*, p. 11 (pp. 15-16).「トレショウは理由なく idiopathisk との表現を（『人間本性総論』、316 頁）、私が egoistisk との表現をもちいた事柄を描くために、もちいたわけではない。」当該の個所は、「派生的欲求および傾向性」〈afledte Drifter og Tilbøieligheder〉に関する議論であるが、「（略）、不安定な欲求は、ただ自分自身を喜ばせる、他者を喜ばせる（略）、そして、その理由から自己功利的（自同情感的）と非自己功利的（共感的）な欲求の区別が導出される」と述べている。なお、シバーンは「〔もしこの語を採用するとすれば〕自分は idiopathetisk と表現するとも述べている。なぜなら、「諸感情は恐らく厳密には sympathisk と idiopathisk と呼ばれるべきであろう。というのも、諸感情は Symapthien と Idiopathien そのものを言うからである。しかし、欲求と衝動はそれらを目指すだけであり、ただ、Sympathie と Idiopathie が起こりうる、もしくは個人がそうなることができる、となることを考える場である。したがって、衝動は sympathetisk と idiopathetisk と呼ぶことがきっと妥当にちがいない」と説明している。

「エゴイズム的な」という表現は心理学、とりわけ情念論的考察の用語として認知されていた。J. P. ミュンスター、あのキルケゴール家の牧師は、『一般心理学概要』〈*Grundrids af den almindelige Psychologie*〉を 1830 年に刊行している。本書は牧師研修所の教科書として使われるべきものであった。その欲求論で「あらゆる欲求はエゴイズム的、もしくは――エゴイズムという表現は通常、自我のゆずることなき昂進について用いられるので――自同情念的 idiopathetisk である」[30] と述べている。このように、「エゴイズム」という語は、一般的な意味との弁別の困難という限界をもちながらも、当時の意味での心理学の領域で術語として認知されていたことがわかる。また、それに相応して、「共感的」という語も術語として用いられていたことになる。

「エゴイズム」と「共感」の関係は、別の観点からまた心理学的に説明される。情念論は、個別的自己における心的現象を明らかにする。そのためにまず固有な自己が確立されている必要がある。たほう、普遍的なもの、もしくは他者を失った自己は乏しいものとならざるをえない。シバーンはキリスト教的な定式をあげて、「私たち自身のように、他者を愛すべきである〔マルコ 12 章 31 節及び並行箇所参照〕のと同様、他者への愛もたいていの場合、自己愛をへた性格を前提する」〈Ligesom vi skulle elske Andre, som os selv, saaledes antager ogsaa ofte Kjærligheden til Andre Charakteer efter Selvkjærligheden.〉と述べ、健全な自己愛が共感的なもの、つまり他者愛と深く結びついていることを強調している [31]。シバーンは、確固たる自己を「人格性」〈Personlighed〉と、また共感的態度を「好意」〈Hengivenhed〉と同置している。

> エゴイズム的なものは個人を精神性の充実のための器官となし、精神性は個人におきて生き生きとはたらく。共感と愛は個人をその充実に開放し維持する。基礎的な情念論的考察はそれゆえ、一方でエゴイズムの本質に迫り、他方、共感と愛の本質に迫ることで成り立つ。[32]

エゴイズム的なものは、まずもって「私を私として構成する」〈et Jeg constituerer sig som Jeg〉もの、「この世界における十全な自己固有の存続」〈en fuldkommen selvegen Bestaaen i denne Verden〉に関わる [33]。これに対して、「エゴイズム（略）の対極に、個人が関与する共感、関心、善意、愛〈den Sympathie, den Interesse, Velvillie, Kjærlighed〉がある。個人固有の自己と異なった対象を、この対象そのものために、志向する〈giver sig hen til〉。その結果、この対象は（略）、個人の営みすべて〈Leven og Virken〉、想像力、感情、努力にかかわる中心になる」[34]。共感は個人を開き、より普遍的なものへと関連づける働きをもつ[35]。情念論の対象は固有の私の心理現象であるが、エゴイズム的なものは《私であるかぎり》の私という相においてみた情念であり、共感的なものは《私が他者とかかわ

[30] Mynster, *Grundrids af den almindelige Psychologie*, Kiøbenhavn, 1830, p. 101. 欲求論のこの箇所の前後で、シバーン『情念論』（p. 80, p. 81）が引証されている。本書は、J. P. Mynster, *Blandede Skrivter*, Bind 5, Kiøbenhavn, 1856, pp. 429-532 に所載である（https://books.google.co.jp/books?id=fVMYAAAAYAA にて閲覧可能、2018 年 12 月 18 日確認）。

[31] Sibbern, *Pathologie*, p. 12 (p. 18).

[32] Sibbern, *Pathologie*, p. 13 (p. 19).

[33] Sibbern, *Pathologie*, p. 14 (p. 20).

[34] Sibbern, *Pathologie*, p. 18 (p. 27).

る》私という相においてみた情念である。

「自分を愛するように他者を愛しなさい」というキリスト教的定式と深くかかわっているが、「エゴイズム的なもの」も「共感的なもの」も「愛」という基盤をもつ。シバーンの叙述において、エゴイズムは「自己愛」〈Selvkjærlighed〉と関連付けられているし、また、「共感」「共感的なもの」は愛〈Kjærlighed〉と並置もしくは同置されている。また、ミュンスターの心理学でも「人間愛的（共感的）感情〈De menneskekierlige (sympathetiske) Følelser〉は一般的な善意に伴う」[36]と、他者愛と共感は置き換え可能な言葉として用いられている。

「共感と愛」と並置されることと相応して反感は「反感と嫌悪」〈Antipathie og Had〉のように「嫌悪」と並置もしくは同置される[37]。そのことによって、キルケゴールの「不安」に関する記述の「共感」と「反感」をそれぞれ「引きつけ」〈drager〉ること、「追いやる」〈skræmmer〉ことと言い換える解釈の妥当性も、以下の記述から裏打ちすることができる。

> さらに以下は注意しておきたい、共感と反感、愛と嫌悪という表現に関して、この二つの表現は自然的性向、誘引〈Tiltrækning〉と反発〈Frastødning〉を言い表している。（略）。しかしながら後者は人生の歩みの中ではっきりと立ち現れる具体的な心的気分を言い表す。反感と本来的な嫌悪の中間にあるものとして、**Aversion** と呼ぶものがある。多くの場合、両者よりもこの表現が好まれている。[38]

エゴイズムと共感の記述と比較して、反感に関する記述が乏しいことは否めないが、共感的なものが反感的なものがあるように、エゴイズム的なものにも反感的なものがあると説明している[39]。シバーンは、エゴイズム及び自己志向〈Selvhensyn〉、共感及び愛、反感及び嫌悪の三つを基本枠組みとして、情念を理解しようと試みた。当時の知識人たち、そしてもちろんキルケゴールもシバーン情念論の基本枠組みを承知していた。すでに見たように、むしろ「心理学」の領域で「不安」を論ずることに際しても、シバーンの「共感［的なもの］」「反感［的なもの］」を読者が想起することを求めていたと考えることが妥当だと思われる。では、「エゴイズム［的なもの］」はどこにいってしまったのだろうか。

3. 自己と愛における葛藤

情念をめぐる三規定による考察は、必ずしも高い評価を得られたとは思われない。まずは「エゴイズム」との用語が日常語とまぎらわしかったこともあるが、「確かにあまり

---

[35] ここで気を付けなければならないのは共感的なものが普遍的だからではない。共感はそのままでは自己完結的なものにすぎない固有の私を普遍的なものに結び付けるからである。「共感的なものは個人〈det Enkelte〉における普遍的な生の表現ではない。普遍的なものにおける、普遍的なものにむけた個人の生の表現である。」

[36] Mynster, *Psychologie*, p. 89.

[37] 「反感」に対する新版全集の注解で「（略）」とされていた部分にまさに「と嫌悪」〈og Had〉がはいる。

[38] Sibbern, *Pathologie*, p. 33 (p. 50). 後年の改訂版『心理学』（1843 年）でも「対象が私たちを前に立ちあらわれるのと同様、刺激するような、また誘引するような影響を私たちにもたらす。しかしながらくわえて何か反発させるものも登場する。こうして共感のみならず、反感が姿を現す。」とシバーンは述べている。

[39] Sibbern, *Pathologie*, pp. 31-32 (p. 47).

に回りくどく、おそらく上面にすぎない」と評されるように、十分に明晰であるといい難かったからである[40]。そのような評価が拭い去れなかったためかは確証できないが、『一般心理学』と『心理学的情念論』の二冊からなっていた『人間精神論』は、一巻本に書き改められる過程で、この三規定に関する記述は大きく簡素化された。「エゴイズム、共感、そして反感について」と題された文章に対応する記述は割愛されて、議論の展開に必要なかぎりで個別に説明される記述となった。結果として「エゴイズム」「エゴイズム的」との表現は目立たなくなったということができる。

改訂に際してシバーンは二つの大きな変更を行った。「共感」「反感」、そして問題をはらんだ「エゴイズム」を用いた解釈枠組を維持しながら、これをより誤解なく展開するために、「共感」「反感」についての表現を精緻化し、また「エゴイズム」（トレショウ的な用語法で“idiopath[et]isk”と表される事柄）という言葉をN. フォクトマンの書評に示唆を得て“autopath[et]tisk”にあらためた[41]。その消息は『心理学』（1843年）では明示されなかったが、おそらく読者の混乱もあったのであろう、『心理学』（1856年）で事情を説明している。

> 私はSympathisk, AutopathiskとSympathetisk, Autopathetiskを区別している。この表現は感情や心的気分、共感や自己情念を可能とする、もしくはそれらに随伴するものを言い表している。これについては私の『心理学的情念論』§3、注2を見よ。この箇所でトレショウに従って”“Idiopathisk”としたものを、フォクトマンにあわせて“Autopathisk”に置き換えている。[42]

シバーンは別の個所で「反感」〈Antipathie〉に言及する際、やはり“antipathisk”と“antipathetisk”を区別して用いている[43]。“Autopathie, autopathisk, autopathetisk”という、

---

[40] *Maanedsskrift for Litteratur*, Andet Bind, pp. 42-43.「このように主要点は、著者によれば、エゴイズムと共感、自己性と愛における好意である。この場合、言葉がたいてい使われている意味で、エゴイズムを何かよからぬものと受けとるのであれば大きな誤解である。生の発展において、エゴイズムと共感は等しく本質的で相互に制約しあう要因であり、同様に生の発展は健全な自己忘却とあわせて健全な自己志向を求める。」

[41] フォクトマン（Nikolai, Fogtmann, 1788-1851）はコペンハーゲン大学神学部教授（1830年）、のちにリーベ（年代不詳）とオルボーア（1833年）の教会監督となった（*Dansk Biografisk Leksikon*, Anden Udgave, Bind VII, København: J. H. Schultz Forlag, 1935, pp. 150-152）。フォクトマンによる『情念論』への書評は以下の文章である。*Dansk Litteratur-tidende for Aaret 1830*, [No. 17,] Kjøbenhavn, 1830, pp. 257-266. [No. 18,] pp. 273-285. især pp. 263-265 [https://hdl.handle.net/2027/nyp.33433081781688]（2019年1月1日閲覧）。シバーンはフォクトマンの示唆に以下の論評で肯定的に言及している。J. L. Heiberg, *Persus, Journal for den spekulative Idee* Nr. 1., *Maanedsskrift for Litteratur,* Nittende Bind, Kiøbenhavn, 1838, p. 564 [https://books.google.co.jp/books?id=AII4AQAAMAAJ&hl]（2019年1月1日閲覧／英訳：*Sibbern's Remarks and Investigation Primarly Concerning Hegel's Philosophy,* edited and translated by Jon Stewart, Copenhagen: Museum Tusculanum Press, p. 177、及びこれに対する注〔p. 350〕を参照せよ）。二つの資料からシバーンが“Autopathie”及び派生語を採用したのは、1843年の『心理学』改訂に先立って1830年から1838年の間となる。

[42] Sibbern, *Psychologie, indledet ved almindelig Biologie, i sammentrængt Fremstiling*, den nye Udarbeidelses tredie heelt igjennm forøgede og forbedrede Udgave, Kjøbenhavn, 1856, p. 397.（https://books.google.co.jp/books?id=eLIRAAAAYAAJ&hl にて閲覧可能、2018年12月18日確認）“et”の有無によって区別された二つの表現の差異については、注29を見よ。

先述の現在もっとも信頼のおけるデンマーク語辞典に採録されず、ようやく外来語辞典で発見できる言葉をあえて用いた[44]。これらの用語がシバーンの独創であると断定するには材料が不足しているが、十分に独特の用語体系であったことは明らかである。少なくとも日常的語法からは離れており、シバーン『心理学』を念頭においてすぐれて意味をなす用語法であったことは確認できたであろう。

当時のコペンハーゲン大学生は心理学を学ばねばならず、ほかでもないシバーン教授があの教本を用いて講義していた[45]。それゆえキルケゴールもその用語法に（形容詞形の“-et-”の語形もふくめ）親しんでいたことが推測される。またシバーン教授は、P. M. メェラーを失ったキルケゴールの指導教授であり、学位論文の提出を支援し、またレギーネ事件に心を痛めた公私にわたる深い関係があった。このような事情を顧慮すれば、かの表現は、シバーン心理学にキルケゴールが通暁しており、トレショウ、シバーン、そして『不安の概念』が献呈されたメェラーとつらなるデンマーク心理学、もしくは“personlighedsfilosofi”[46]に自身がつながっていることを示した表現であると考えることが妥当ではないだろうか。「セーレン・キルケゴール」という実名で本書が刊行されるべく準備されていたことも、その証左となるだろう[47]。

「共感的反感」「反感的共感」との表現は日常語の範囲でも理解できるため、これまでその立ちいった意味はもちろん、またこの表現が選択されている文脈や背景が顧慮されることがほとんどなかった。『新版全集』における注記のみがその例外であった。これまでの考察にしたがうならば、「共感」の語で意味されているのは、日常語とかけ離れているわけでないが、当時の心理学用語としては、「他者〔対象〕志向」「好意（愛）」であり、その形容詞は「他者志向的な」「自己非束縛的」、さらには他者という自己ならぬ対象に「誘引される」という意味で理解されなければならない。たほう「反感」は「他者〔対象〕反発」「嫌悪」、さらに「他者反発的な」、対象に「反発する」と理解されることになる。「共感的反感」とは回りくどい心理学的解釈をすれば、「対象志向的な反発・嫌悪」、その反対は「対象反発的な好意・志向」ということになる[48]。従来の解釈はこれから大きく逸れたものであったとはいい難いが、十分な根拠があたえられていなかったことは明らかであ

---

[43] シバーン自身が、この些細な区別を一貫して用いたかには疑問がのこる。『心理学』（1843 年）で“autopathisk og antipathisk”と記した個所を（*Psychologie*, 1843, pp. 347-348）、『心理学』（1856 年）で“autopathetisk og antipathetisk”と改めている (p. 406)。

[44] 『デンマーク語外来語辞典』（*Meyers Fremmedordbog*）では、“Selvfølelse, Selverfaring”の訳語が当てられている。新版全集ではほかに“selvlidende”が示されている。いずれにしても、古典語の“auto-”〔自分〕と“pathia / patheia”の直訳にすぎず、十分な説明でない。

[45] 平林「《心理学》の問題」、42 頁。

[46] “personlighedsfilosofi”については、*Dansk Litteraturhistorie 5: Borgerlig Enhedskultur 1807-48*, 3. udgave, København: Gyldendal, 2000, pp. 532-533 を参照せよ（執筆者は Finn Hauberg Mortensen である）。

[47] *SKS* K4, 323. なお、実名を『不安の概念』の著者とした草稿（Pap. V B 42）を以下で確認できる。http://www.kb.dk/en/nb/tema/webudstillinger/sk-mss/mss1/15.html（2018.12.18. 確認）。草稿では〈Om / Begrebet Angest〉とされ、〈af Søren Kierkegaard / M: A:〉であった（“/”は改行があることを示す）。刊行の直前、〈Om〉が削除され、著者も〈Vigilius Haufniensis〉に変更された（Pap. V B 72, 1）。

[48] ここで「他者〔対象〕反発的」と記したが、もちろん『不安の概念』における表現、つまり他者関係を想定する「共感」との対比における表現である。もし「自己情念」に関わる問題であれば、自己に対する反発・嫌悪が問題になることは言うまでもない。

る。むしろ『創世記』第三章の堕罪物語の具体的な描写があったおかげで、おおむね正当に理解することができていたというのが実際の状況であったと考えられる。

「共感的反感」をこのように理解することによって、キルケゴール理解のこれまで十分に顧慮されなかった地平が開かれる。すでに見たように「エゴイズム」との術語に、シバーンも問題点があることを少なからず認め、それゆえに――その改訂が十分に適当なものであったか疑問がのこるにせよ――表現をあらため、新しい用語として「自己情念的なもの／に関わるもの」〈det Autopathiske, det Autopathetiske〉を提案した[49]。そして、シバーンの枠組みでは「エゴイズム」と「共感」、自己性と愛（好意）の対比が根本的であり、反感・嫌悪はエゴイズムと共感にそれぞれ多様性をもたらす要素であった。「共感」を“Autopathie”と対比するシバーンの用語法への更新は、キルケゴールの学生時代から『不安の概念』（本書に“Autopathie”及びその派生語はあらわれない）までに実施されたはずだが、この用語法がキルケゴールにおいても採用されているのである。シバーン的対比を前提とする表現がすでに『あれか―これか』にみいだされる。

> 倫理的な人生観においてはじめて自己情念の〈autopathiske〉懐疑と共感の〈sympathiske〉懐疑が沈静化する。自己情念の懐疑と共感の懐疑は本質的に同じ懐疑であるから、同一のものにおいて沈静化するのである。したがって自己情念はエゴイズムの表れではなく、あらゆる他者の自己を要求するのと同じ意味において自己自身の自己を要求する自己愛の要求なのである。[50]

『あれか－これか』では当該箇所をのぞいて、“sympathetisk”が用いられている[51]。なぜあえてこの箇所だけ“sympathisk”と表記したのか、使い分けを意図していたかこの箇所

---

[49] 従来の邦訳では“autopathisk”に定まった訳語が当てられてこなかった。デンマーク語原典を底本とする『著作全集』から列挙してみると、「自感的」（*SKS* 3, 258〔第二巻、378 頁〕）、「自己情熱的」（*SKS* 4, 231〔第六巻、34 頁〕／“lidenskab”との差異が不明）、「自己感情的」（*SKS* 6, 107〔第四巻、183 頁〕; *SKS* 8, 36〔第八巻、302 頁〕／通常、感情と訳される“følelse”との区別がつかない）、「自己感覚的」（*SKS* 6, 164〔第四巻、269 頁〕／感覚“sans”ではない）、「自己パトス的」（*SKS* 6, 230; 247〔第五巻、93 頁及び 119 頁〕／パトスに正当な説明があれば妥当かもしれない）、「自苦的」（*SKS* 6, 332; 339; *SKS* 7, 229; 532〔第五巻、266 頁及び 277 頁、第六巻、567 頁、第七巻、380 頁〕／心理学的に、「苦しみ」にとどまらない「受動」のニュアンスが失われる）とまちまちになっている。相応して“Sympathie, sympathisk, sympathetisk”の訳語も変更される場合もみられるので事情は厄介である。本稿でも“Pathologie”を『情念論』とした文脈で、「自己情念…」等との訳語を充てたが、背景の説明なしに理解しにくい訳語であることを率直に認めざるをえない。

[50] *SKS* 3, 258.（第二巻、378 頁）

[51] *SKS* 2, 167; *SKS* 3, 23, 32, 33. を見よ。興味深いことに「他者志向の」〈sympathetisk〉とある箇所では対比的表現として、シバーンの新しい用語「自己情念の／自己情念に関する」〈autopathisk ／autopathetisk〉に代えて「エゴイズムの」〈egoistisk〉が用いられる。キルケゴールがシバーンを受講したのは、『心理学的情念論』（1828 年）刊行間もない 1830 年及び 1831 年である。注 41 で述べたように、シバーンの用語法の変更は 1830 年と 1838 年との間と推測される。しかし、キルケゴールの聴講時に、いずれの表現が用いられていたかは不明である。いずれにしても、『あれか－これか』の刊行は、1843 年 2 月であり、当然、原稿はそれ以前に仕上げられていたので、改訂されたシバーン『心理学』（1843 年）を参照することはできなかったと思われる。

のみでは判断できない。推測の域をでないが、“autopathisk”にひっぱられて、この語形となったのかもしれない[52]。

さらに改訂版『心理学』（1843 年）が刊行された 1844 年になると[53]、

> かく理解するならば、そしてこれは無論ソクラテスの解したところであるが、生活と諸事情とが教師になるための機縁であり、そして逆に他者が何かを学ぶ機縁であることによって、教師は相互関係の内にある。したがってその態度は常に、自己情念の事柄〈autopathisk〉であると同時に、他者志向的／他者関与的〈sympathetisk〉である。[54]

と記している。この箇所は従来、必ずしも意味が判明な個所ではなかったが、シバーンの用語法を想起すれば、〈ソクラテス的意味、つまり人間的な意味での〉「教師」が「他者」が何かを知るのを支援する意味で「他者のため」〈他者への好意に関わる〉だけでなく、〈イエス・キリストのような「教師」とは異なって〉生きる糧を得るなどの理由から、つまり「自己志向」〈Selvhensyn〉の事柄として教師であるときわめて分かりやすい解釈をもたらしてくれる。以降、用例が必ずしも多くないので、ねじれた語形（-et- の有無に注意）をあえて選択したかつまびらかでないが、キルケゴールは“autopathisk”と“sympathetisk”という一対の表現を一貫して用いている。

この対比がもっとも頻出するのは、『人生行路の諸段階』であり、とりわけ「有罪か？―無罪か？　苦悩の物語」である[55]。「有罪か？－無罪か？」は、「心理学的実験」と呼ばれているので、シバーンの用語法が採用されることはまったく適切だと判断される[56]。『人生行路の諸段階』における両用語が意味するところの解明は非常に重要であると考えるが、本稿の紙幅では扱いきれない多様な問題も考慮されなければならないので、別稿に譲りたいと考える[57]。最後に一か所のみ、従来、あまり顧慮されなかった個所を検討することにとどめたい。

『哲学的断片への後書』は、考察全体の総括に相当する論述で、周知の「宗教性 A」（一般人間的な宗教性）と「宗教性 B」（すぐれてキリスト教的な逆説的宗教性）という区分をあげている。そのような宗教性のあり方は人間が関係すべき対象の特徴づけという観点から、「A. パトス的なもの」〈Det Pathetiske〉と「B. 弁証法的なもの」〈Det Dialektiske〉

---

[52] 実は、“sympathisk”の用例はこの一箇所である。したがって、意図的な使い分けをしていたとは考えにくい。『人生行路の諸段階』の初版に用例があるとのことだが、全集版ではこの箇所を清書原稿にしたがって“sympathetisk”に本文決定している（個々に引証しないが、過去のすべての全集版でもこの本文決定と同じ判断である）。*SKS* 6, 441 の欄外注記を見よ。

[53] キルケゴールの蔵書目録に当該書は含まれていない。*Auktionsprotokol over Søren Kierkegaards Bogsamling* (udgivet af H. P. Rohde, København: Det Kongelig Bibliotek, 1967) を参照。

[54] *SKS* 4, 231.（第六巻、34 頁）

[55] *SKS* 6, 107; 164; 230; 247; 332; 339.

[56] 注 55 で列挙した箇所の注解では、一貫して「自己受動的・自分のために」〈‘selvlidende’; på egne vegne〉との語釈だけが与えられている。『新版全集』の編集方針に忠実であれば、シバーン心理学との関連性ついての歴史的背景を説明することが必要であったと考えられる。

[57] たとえば、「心理学」そのものの解明もそうであるし、「実験」も同様の事情にある。これらについての解釈については拙稿を参照されたい。『神学研究』第 50 号（2003）、105-117、及び『理想』所載の拙論（注 21）を参照されたい。

に分かたれている[58]。「弁証法的なもの」に「Bへの付録」[59]が添えられている。この論述は、「a）罪＝意識」「b）つまずきの可能性」「c）共感の苦痛」の三つの項目からなっている。項目の前文をふくめて五頁足らずであるが、『死に至る病』第二部、「B・罪の継続」[60]の原型となる重要な論述であると考えられる。本論との関係で注目したいのは「つまずきの可能性」である。この短い一節は「あるいは自己情念の葛藤」〈eller den autopathiske Collision〉[61]とも呼ばれている。続く「共感の…」〈Sympathiens ...〉との対応を考えて用いられた表現であることは明白である。

まず「共感の苦痛」から見ることにしよう。この箇所はキリスト教信仰によってキリスト者が、教会という新しい共同体を形成する一方、その信仰ゆえに自然的な人間規定から切り離される痛みについて論じている。

> 信仰者は（略）人間としての（qua）各人に可能的に（latent）共感をもっていないし、共感をもつこともできない、その本質上（væsentligen）ただキリスト者に共感をもつのみである。[62]

さしあたり「共感をもつ」と訳した表現は“sympathisere”であるが、この語の日常的な意味でも言わんとするところは理解可能である。「付録」での文章は回りくどい印象をあたえる（それは『後書』の使命が、『断片』で扱った問題、救い主としてのキリストへの信仰に歴史的衣装を着せることでありながらも、その論述は依然、キリスト教本来の教会的、宣教的表現でなく、思想的、学問的表現を採るためである）が、端的に問題を指摘すれば、「信仰者は父母を憎まなければならない、ということ（中略）が妥当する」[63]とあるように、ルカによる福音書14章において「弟子の条件」[64]との表題で語られる問題であ

---

[58] 本来、私的なことへの言及は避けられるべきであることを承知で一言記しておきたい。二つの宗教性に関する考察は、筆者が卒業論文でとりあげた主題である。その際、ここで述べる「自己情念の葛藤」と「共感の痛み」が何を意味するのかという問題につきあたった。就中、当時入手できた辞書に採録されていない「自己情念の」〈autopathisk〉をどう解釈すべきか皆目見当がつかず、正直に告白すれば、体裁をつくろって提出せざるを得なかった苦い記憶がある。十分な答えであるかは読者の判断を仰がねばならないが、当時の宿題に一つの答えを見出したとの想いがある。学部以来、温かくご指導いただいた故小川圭治筑波大学名誉教授に本稿を献げたいと願う。

[59] *SKS* 7, 529-533.（第七巻、376-382頁）

[60]『死に至る病』での論述は次のようである。「A・自己の罪について絶望する罪」「B・罪の赦しに対して絶望する罪（つまずき）」「C・キリスト教を肯定式的に〈modo ponendo〉廃棄し、それを虚偽であると説く罪」、それぞれ「罪」をめぐっての絶望、罪からの救い主「キリスト」に対する絶望、キリストを宣べ伝える「教会」に対する絶望とまとめることができる。「（人間論をふくむ）創造論」「和解論」「救贖論」にそれぞれ対応するが、その点をこれまで指摘した研究を寡聞にして知らない。

[61]「葛藤」と訳した語は“Collision”である。従来は「衝突」との訳語が当てられていた。もちろん、この語はラテン語”con-laedere”「ともに／ぶつかる」からつくられた名詞形であるので特段の問題はないが、内容的には今日の心理的葛藤〈konflikt〉に相当すると考えられる。「葛藤」の概念は、レヴィン（Kurt Zadek Lewin、1890-1947）によって広く知られた用語であり、キルケゴールの時代にこの用語はなかった。対応語としては一致しないわけだが、内容を考慮してあえてこのように訳した。

[62] *SKS* 7, 532.（第七巻、381頁）

[63] *SKS* 7, 532-33.（第七巻、381頁）

る。キルケゴールが著作活動の最終局面で集中的に考察をふかめた、キリスト教国家としてのデンマークの問題、デンマーク市民であることがただちにキリスト者である擬制に対する根本的な批判である。キリスト者であることは、のちのキルケゴールの表現によれば「単独者」となることであり、その帰結として自然的関係を放棄することが求められる。単独者であるには自然的関係との断絶が必要であり、したがって、それに伴う痛みをも受けとめなければならないというのである。キリスト者となることは、父母など家族、また愛する人との人間的な関係、それは倫理的であったり美的であったりもするが、それに安住するか、その場合、キリスト者としての幸いを断念するべきであるし、また、キリストを愛し、永遠の幸いを得ようと望むならば、人間的関係を放棄するかの葛藤を抱えることを意味する。ここではその際の「痛み」に焦点をあて、「共感の…」と呼ばれているが、教会闘争に臨んでキルケゴールは、「共感にかかわる葛藤」〈sympathetisk Collision〉について言及し、これに対応する「自己情念の葛藤」〈autopathisk Collision〉にも言及している[65]。

「自己情念の葛藤」は「つまずきの可能性」という表題から始まっているから、その意味するところは明らかであり、「自己情念の葛藤」という表現のわかりにくさが問われることはなかった。ここで言われる葛藤は、キリストという信仰の対象そのものにある、つまり「神が人となった」というキリスト教信仰が依拠する歴史的報知にある。キリスト者となることは「神が人となった」ことを受けいれる、つまり信仰する瞬間から始まる。「知性に反して信仰を要求する逆説は、直ちにつまずきを提示する」[66]。信仰とともに、人間的知性を放棄して逆説を受けいれ、キリストにある幸い得るか、知性に固執して逆説を拒否し永遠の幸いから閉め出されるか、の窮境にたたねばならない。しかしながら、この窮境は、私の人間的知性と信仰による幸いの問題であり、その個人の問題として完結した問題である。私が逆説を受けいれるか拒むかを選ぶ以上の広がりをもたないとも言える。このような信仰による葛藤の特性を鑑みて、キルケゴールは「自己にもっぱら関わる」という意味で、「自己情念的な」葛藤と呼んだと考えることができる。

翻って「共感の苦痛」、のちの「共感にかかわる葛藤」と呼んでおいた事柄を「つまずき」つまり「自己情念的な葛藤」との対比で考えれば、日常的な意味で「共感」と呼ぶよりはシバーン心理学からキルケゴールが継承した意味で「他者志向的」とか「他者愛における」と理解した方が、より深みを持って理解できることになる。「共感の苦痛」は何よりも、個人がキリスト者となることよって、その人が慣れ親しんだ、また人間として当然であると考えていた他者との関係から断絶させられることによって生じるからである。のちのキルケゴールの省察から明らかなように、キリスト者となることをめぐる葛藤を、くだんの「自己情念的」「自己性の」と「他者志向の」「〔人間に対する〕好意における」との対立において考えていたことは明らかである。心理学的な解釈枠を想定することによって、これまで十分に顧慮されなかった問題群とのつながりがみえてきたのではないだろうか。

---

[64] ルカ 14 章 25-26 節。「大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」」

[65] *SKS* 26, 289-290（NB 33: 50 ／ 1854 年）

[66] *SKS* 7, 532.（第七巻、380 頁）

むすび

シバーン心理学、とりわけ情念論をめぐる用語法を検討することによって、これまで相応に理解できていたと考えられてきたキルケゴールの本文に、別の点から照明をあてることができたと考える。シバーンの心理学的表現をめぐる用語法にも必ずしもつまびらかでない点も多く（それゆえ繰り返し改訂をしたと思われるが）、それを受け継いだと考えられるキルケゴールの用語法もどこまでシバーンに忠実であるか、また一貫しているかも今一度検証しなければならない。何より、本論で扱った表現は、もっぱら心理学的考察のために創作された“idiopath[et]isk, autopath[et]tisk”をのぞいて、古典語起源の少し硬い表現であるとはいえ、日常的に使用される言葉である。もちろんキルケゴールがこの言葉を日常的な意味で使用している場合も少なくない。また、本稿ではほとんど取りあげなかったが、「エゴイズム〔的な〕」〈egoismus, egoistisk〉という表現も日常的用法と学術用語的用法の二重性をそなえていたことが明らかであるので、これも配慮する必要がある[67]。

キルケゴールの本文にもその時代の刻印は明らかである。時代が異なる私たちにとってそれはしばしば疎遠なものとなっているため、本文が示すもの、さらにはらんでいる緊張を取り逃がしていることも少なくない。しかしながら、本論での場合のように、同時代の営みとつきあわせながら読み解くとき、その一端が垣間見えるときがある。細部がわからなければならないと強弁するつもりはない。しかしながらそのような細部にも、どうでもよいものと決定的なものがある。本稿により、キルケゴールの心理学的用語がそのような決定的な細部であり、また、そのような細部がシバーンをふくんだデンマークの豊かな心理学的考察の伝統に深いつながりがあることを指摘して本稿の結論としたいとおもう。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻非常勤講師／
関西学院大学国際学部教授）

[67] たとえば、「共感的反感」という表現の直後のパラグラフに付された原注が挙げられる。「これについては『あれか－これか』（コペンハーゲン、1843 年）を精査すると良い。特に、第一部が不安にみちた共感〈Sympathie〉とエゴイズム〈Egoisme〉の中にある憂鬱の産物〈Tungsindighed〉である、第二部においてそれは説明される、ことを注意する場合〔、それは明らかである〕」（*SKS* 4, 348〔第三巻、500 頁〕）。また、この原注への注解を見よ（*SKS* K4, 411）。

What Is "Sympathetic Antipathy" in Kierkegaard's *The Concept of Anxiety*? On the Historical Background of His Psychological Terms

Takahiro HIRABAYASHI

This essay seeks to discuss "sympathetic antipathy" and other psychological terms in Kierkegaard's writings. Kierkegaard characterized anxiety as "*sympathetic antipathy* and *antipathetic sympathy*" in *The Concept of Anxiety*. As the commentary of the critical edition of Kierkegaard's writings notes, these terms should be referred to in the context of contemporary Danish psychology. F. Chr. Sibbern, one of Kierkegaard's professors, published the so-called *Pathology* (1828) as a textbook for his students at the University of Copenhagen. In *Pathology*, Sibbern depicted a variety of psychological phenomena in terms of "egoism, sympathy and antipathy." In the Sibbernian use of these psychological terms, "egoism" is related to interest of the self, "sympathy" to love toward others, and "antipathy" to hatred toward the self and/or others. Although Sibbern later replaced "egoism" with "autopathy," this terminology continued to be used in his subsequent works of psychology. Kierkegaard's term "sympathetic antipathy (antipathetic sympathy)" is interpreted as "fascinating disgust (disgusting fascination)," and the Sibbernian use of these words confirms this interpretation. Further, Kierkegaard accepted the Sibbernian contrastive use of autopathy and sympathy and thereby analyzed psychological conflicts inherent in the Christian faith. As per our analysis, the Danish tradition of psychology is reflected in Kierkegaard's psychological terms.